

---

# きこりと妖精

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きこりと妖精

### 【Nコード】

N8337L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

町はずれの小さな小屋。そこに一人寂しく生きるきこりがいました。ある日、きこりは森の奥で妖精の男の子に出会いました。きこりと妖精、二人での生活が始まりました。

## （前書き）

きこりと妖精の童話チックなお話です。途中でオチが分かると思いますが、最後までお楽しみください。

村はずれの小高い丘。そこにきこりの住む家が建っていました。家というよりも小屋と言った方が相応しいくらいの小さなものです。きこりは毎日そこから山奥に入り木を切っていました。きこりの家ですらあまり人が来ないところなのでその先の山などどう間違っても子供がいるはずはありません。しかし今きこりの目の前にいるのはまぎれもなく人間の子供の後ろ姿です。タヌキかキツネが化けているのでしょうか。

「なあ、ボク。迷子かい？」

見ていてもしょうがないので声を掛けてみました。その声でようやくきこりの存在に気付いたのか、驚いた様子でこちらを振り返りました。子供はせいぜい7、8歳といったところでしょうか。

「ふもとの村の子供かい？」

子供は首を横に振りしました。

「じゃあタヌキかキツネか？」

「ぼく、ようせい。」

「ようせい？ようせいってあの、森の精とかの妖精かい？」

子供はこっくりと頷きました。きこりは驚きました。妖精を見るのは初めてです。しかし話しに聞く限りでは妖精というのは15cmほどの身長しかなく背中にはトンボのような羽がついているということでした。目の前の子供はどうみても普通の男の子のようでした。そのままにしておくわけにもいかず、きこりは仕方なく家に連れて帰りました。

「何もないがゆっくりするといい。それで、君の名前は？」

「カーベル。」

「カーベル。変わった名前だなあ。妖精にとっては普通なのかい？」

男の子はさあ、というふう to 首をかしげました。

「カーベルは何の妖精なんだい？」

「あかのせい。」

「あかの精？聞いたことないなあ。」

くるるる。どこからかわいらしい鳴き声のようなものが聞こえました。カーベルが恥ずかしそうに顔を赤らめています。どうやらカーベルのお腹の虫がなった音だったようです。

「何か食べよう。何がいい？」

「ぼくたちはあかいものしかたべないの。あかのせいだから。」

きこりはここでもうやく合点がいました。あかの精のあかは色の赤だったのです。

「赤かあ。これなんかどうかな？」

きこりはりんごを取り出しました。

「うわあ、おいしそうなあか。」

カーベルは嬉しそうです。さっそく皮を剥いてあげることになりました。一口サイズに切り分けて皿に盛ります。

「さあどうぞ。」

「あれ？あかくない。」

「まあ赤いのは外側だけだからね。」

「これじゃたべられない。」

「じゃあ、これかい？」

きこりはりんごの皮をカーベルに差し出しました。カーベルはいただきます、と小声で言って早速一口。

「おいしい！こんなにおいしいのはじめてたべた。」

そう言って一気に平らげてしまいました。

「なんか変な感じだなあ。」

きこりは笑ってそれを見ていました。それから風呂に入れてあげることになりました。風呂を沸かし服を脱がせます。そのとき背中に何かを発見しました。小さな羽根です。

（これが妖精の羽根か。）

それは思ったよりもきれいなものではありませんでした。鳥やトノボの羽根のようなものではなく、骨組みの入った一見皮膚のような

ものでした。子供だからでしょうか、これで飛べるとは思えない小ささです。

数日が過ぎました。カーベルはまだきこりの家にいます。

「そろそろ帰らなくていいのかい？」

きこりも不安になってきました。きっと家族や友達が心配しているはずです。

「かえれないの。」

カーベルは寂しそうにつぶやきました。

「はあ、何か事情があるんだな。教えてくれるかい？」

カーベルはこくと頷き、話し始めました。

「ぼくたちはここからずっとずっととおくのもりにすnderの。そこであかいきのみをたべたりあそんだりしてすごしてたの。でもだんだんきのみがなくなっていくたの。ぼくたちはみんなであかいたべもののあるところにひっこすことにしたの。」

「その途中ではぐれた。」

カーベルは首を横にふりました。

「うっん、まだみつかってないの。いまさがしてるところ。」

きこりはようやく状況が把握できました。どうやらカーベルたち赤の精は食料を求めて放浪しているようです。みなで手分けをして移り住むのによい場所をさがしているのでしょうか。

「だからぼくまたさがしにいかなくちゃいけないの。」

「そうか。じゃあもう少しここで休息をとってから行ったらどうだい？」

カーベルは少し悩みましたが、最終的にはそうすることにしました。

それからの数日はきこりにとってとても充実した楽しい日々でした。人里離れたところに住んでいるせいで彼を訪ねてくる友人も滅多にいません。つまり彼は寂しかったのです。その寂しさをカーベルがまぎらわしてくれました。

しかし、楽しい日々もそう長くは続きません。カーベルはいつまでもここに居るわけにはいきません。発たなくてはいけないのです。「そうか、明日発つのか。そうだ、それなら今日はりんごをたくさん剥いてあげよう。」

「でも、あさせんぶたべたからないよ。」

「買いに行くのさ。町にね。」

二人は小高い丘をおり町に入りました。きこりには久々の町です。とても新鮮に見えました。カーベルにとっては初めての場所です。町に入るなり興奮しっぱなしでした。

「すごい、ひとがたくさんいる。」

「そうだろう。村の外れに一人で住んでるからこんなにたくさんの人を見なかったんだな。」

カーベルには目に映るものがすべてが新鮮でした。つついはしゃいでしまいます。

「ほらほら、そんなにはしゃぐと転んでしまうぞ。」

言った矢先に転んでしまいました。

「いたた。」

「大丈夫かい？」

カーベルのひざのあたりからは緑色の液体が滲んでいました。どうやら血のようです。

（緑色の血か。ちよつと変な感じだな。）

きこりは血をガーゼでそつと拭つてあげました。

そして、二人はりんごをたくさん買い家に帰りました。

「さあ、風呂に入っておいで。そのあいだにりんごを剥いておいてあげよう。」

カーベルはもうお腹がぺこぺこでした。

「えつと、ナイフはどこにやったかな。ああ、あつたあつた。」

きこりは早速りんごの皮を剥き始めました。しかし、あと数時間と迫った別れを思うと急に視界がぼやけてきました。

「いたつ。ああ、切ってしまった。」

涙でばやけるせいで、きこりはナイフで親指を怪我してしまいました。血がぷつくりと玉を作ります。カーベルの目線に気付きました。じつと傷口を見ています。

「ああ、気にしなくていいよ、大丈夫。ばんそうこうを貼ろう。」  
きこりは立ち上がりばんそうこうを探しに隣の部屋へと行きました。カーベルもあとに続きます。

その夜。屋根の上に上半身裸のカーベルの姿がありました。しきりに羽根を動かしています。これは赤の妖精たちの連絡手段なのです。遠くに離れた仲間に、羽根を擦ることによって発生する超音波のようなものを送って情報を伝えるのです。

こちらカーベル。ようやく食料を見つけた。もちろん大量にだ。しかも予想以上に美味かった。マチとかいうところに行けばもつとあるぞ。みんなも早く来い。

月明かりの明るい夜。人々は眠りについていました。これから起こる惨劇も知らずに。月の光に照らされて、口元を真っ赤に染めたカーベルが舌なめずりをしていました。下には冷たくなり始めたきこりが横たわっていました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8337/>

---

きこりと妖精

2010年10月8日14時46分発行